

平成27年12月28日

学位請求論文（課程博士）審査報告書

学位請求論文：イデオロギーの必然性について

ーラカンの精神分析理論におけるイデオロギーと現実界ー

学位請求者：専修大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程

氏名 土佐 巖人

審査委員

主査 文学部教授 伊吹 克己

副査 文学部教授 神崎 繁

副査 愛知大学文学部教授 檜村 愛子

本論文は現代フランスの精神分析家であるジャック・ラカンの理論を、「イデオロギー論」の観点から考察したものである。この試みについてはスラヴォイ・ジジエクのものがよく知られており、彼に追随する形でいくつかの試みがあるが、哲学的文脈から考察するものは数少ない。更に言えば、土佐巖人氏は「なぜラカンなのか」という基本的な問題意識から出発して、「イデオロギー論」の文脈で問題にされるような芸術作品の分析や、社会批判ということを考えてみようという点に、この論文の独自性があるように思われる。別の仕方と言うなら、なぜ哲学者バディウやジジエク、あるいはマルクス主義理論家として知られるアルチュセールといった現代の思想家たちが、ラカンの理論に歩み寄ったかとか、どこで現代思想と精神分析が重なっているかということを示すことに、この論文の視点が置かれている。

以上を別言するなら、ラカンの言う「現実界」への注視、あるいは「現実界」への遮蔽物として我々の文化や生活世界が出来上がっていることを示すことになる。これを確認すれば、おのずから、イデオロギーは脱却すべき虚妄だという考えにはならず、イデオロギーが人間主体にとって必然的なものであるということを示すことになる。そうなれば、イデオロギーにおいて問題になってくるような変革の主張ではなく、決定不可能な状態での決定を各人が引き受けるということこそがイデオロギーにとって重要になるという、イデオロギーに関する新たな主張も出てくることになるよ

うに思われる。

本論文の具体的な内容は次の通りである。

まず、**序文**において本論文の問題意識を鮮明にするために三島由紀夫の発言と作品が持ち出されている。美醜などの価値観が、何らかの秩序であるならば、我々の欲望も秩序に依拠しているのではないかという考えが、三島の立場を参考にしながら記述される。これによって、その秩序の発生や、変革はどのようになされたのか、という問題が浮き彫りにされた。するとおのずから秩序が変わらず再生産され続けること、あるいは、初期のラカン理論がその背景にあったとされる「構造主義」思想が取りこぼしがちな、構造の発生や変化、動的な再生産といった通時的な問題が示されることになる。ここでもうひとつ重要になるのが、我々の日常的な生活や欲望を規定してくるこうした構造や秩序を、「イデオロギー」と呼ぶことができるということである。アルチュセールの、イデオロギーとはひとつの世界観だという着想が問題になってくるのである。

第一章では、ラカン理論の概略が示される。この章は他の章に比べて長くなってしまい、論文としてのバランスが悪いと言えるが、この論文で使う道具立てが紹介され、論文全体の流れの見取り図にもなっている。

まず、ここでは「シニフィアン」や「パロール」といったラカンの基本的な概念の検討から始められ、それらがどのように扱われているかを見ることで、超自我や転移といったフロイトに由来する概念がどのように練り直されたかが検討されている。ラカンの場合、構造が組み変わる際には、欲望などの我々の日常的な情動も絡んでいるということが、ここで確認される。「シニフィアン」や「ラングージュ」から議論を始めたことで、そこからこぼれ落ちるものとしての「現実界」が浮き彫りになっている。この「現実界」が、構造の組み換えの契機になっている。「現実界」という、言ってみればわれわれがそれに浸かっている意味の世界の亀裂のようなものを見逃さず凝視することで、ラカンの精神分析と、バディウや晩年のアルチュセールの哲学が重なり合う。これはすなわち、社会変革を肯定する哲学がラカンの精神分析を援用する所以である。

第二章では、真理と幻想という区分が、ラカンの精神分析を通して見るとどう扱われるかということが問題にされる。我々が「シニフィアン」によって構築された世界の内部で生きているということは、その世界は客観的現実から離れた幻想ではないかということになる。しかし、ラカン理論というのは、そういう批判をするものではなくて、その幻想こそが、我々に欲望することを可能としているということを主張しているのである。欲望の観点から見ると、真理と幻想は等しい。幻想がうまく機能していないと、主体は世界にうまく関わっていくことができない。本論文では、これをフロイトの「ハンス症例」を通して考察する。ラカンはフロイトと異なった解釈をしている点はず確認される。これに合わせる形で、バディウとアルチュセールの真理観も比較されている。一般に精神分析においては、「ハンス症例」は家族の問題に還元されるが、欲望の前提条件としての幻想を、社会的なものとして見るなら、それこそがイデオロギーということになる。こうして、第二章の論点を社会に向け変えて、第三章に入ることになる。

第三章に来て、アルチュセールのイデオロギー論が論じられる。前の章までに言及されたアルチ

ユセールの立場は晩年のものだったので、そこに至るまでの変遷が示される。当初、アルチュセールはイデオロギーを歪曲だとして、科学と対立するものだとしていた。そして、科学とはどういうものか説明しようと試みて、どうもうまく説明できないままになっているのではないかと彼は見ていた。アルチュセールの「イデオロギー論」では、ラカンの鏡像段階理論を初めとした、「想像的なもの」が重視されている。しかし、アルチュセールが、科学とイデオロギーという対立構図を自ら捨て去るに至って、「想像界」よりも「現実界」に軸足が移っていったというのが本論の主張である。ラカンについては《「想像界」から「現実界」へ》という説明はよくされるが、アルチュセールについてそうした説明をして、このあたりを通時的に追っていった点は評価できる。それに加えて、認識の枠組みを自ら産出しているからだという理由で、彼が17世紀のスピノザを積極的に評価したのではないかと検討されているが、この点なども含めて、あまり論じられていない部分が議論されている。第二章まで論じたことと、この章の内容を踏まえれば、イデオロギーは単なる、脱却しなければならない虚妄だという論点は否定できるだろう。

第四章ではラカンの雄勁な論文「論理的な時間と予期される確実性の断言」が取り扱われている。これを筆者は、発生の瞬間についてのカリカチュアだと主張する。すなわち、単に抑圧的に一つの構造がやってくるのではなくて、主体の側からの働きかけがあって成立しているのではないかとされている。この四人の寓話には多くの議論がある。筆者はそのオリジナリティを強調するために、ジジエクの「信じていると想定された主体」と結びつけて論じている。この箇所元になっているのは、学会の査読論文であるが、今回博士論文の一部にするにあたって、ここまでの文脈にあわせて、歴史が事後的に構築されるということと、主体の行為によって、ひとつの構造が実現するという、発生の契機という論点が増えられている。我々がその中で生きている世界観の内部には、「現実界」という空白があって、それから守られるためにも、人はイデオロギーが必要になり、それは性格上一人一人の行為によって作られるものである。ここまで踏まえて、第五章で、では、我々がその中で生きるしかないイデオロギーとどう付き合っていけばいいのか、ということを経験分析に立ち返って考える。つまり、イデオロギーは単に抑圧的なものではなくて、主体に必要とされるものなのである。したがって、主体の側からの働きかけがあってイデオロギーは成立しているのである。

ここまでは、教条主義的マルクス主義の言説が示すような革命を称揚するような内容を排除せずに議論が進められてきているが、**第五章**では、ただ革命や変革を叫べばいいものでもないということが、ラカンの文脈に沿って考察されている。ラカンが「精神分析の終わり」として想定するものを考えれば、変革の契機として「現実界」を扱う以前に、「現実界」を前にした決定や決断ということ、主体自身が引き受けるということ、これをまず重要視すべきだと筆者は主張する。現在、何らかの構造が与えられているということは、何らかの決定が一度はなされたということなので、それをまず明確にして受け入れるかどうか、ということこそ最初に考えるべきではないかということである。

結論では、まず、イデオロギーというのは、脱却すべき虚妄ではなくて、必要なものであったというこの論文のいわば出発点が確認される。しかしそうすると、変革か秩序か、あるいは序文で触れられている三島由紀夫の設定した問題意識で言うなら、革を成し遂げるのは行為か認識か、とい

う二項対立が問題になる。しかし、本論文の主張によれば、全ての世界観や文化と呼ばれるものの中心には「現実界」が常に横たわっている。そのことがイデオロギーの存在の必然性を指示する。このこと、即ちイデオロギーが必然的なものだということを論じれば、自ずから、秩序か変革かという二項対立も、行為か認識かという二項対立も崩れていくことになる。社会的な変革を目指すというなら、単なる貧富の逆転劇のようなものではなくて、今まで存在しなかったものが到来するような形でなければならない。これが本論文の結論として示されている。

以上のような内容の論文について審査が行われたが、精神分析と哲学史に関する広範な知識に基づき、その明快な文章と相まって、確実な論理構成で組み立てられていることが審査員に先ず評価された。「イデオロギー」という、精神分析においては、単なる「防衛機制」の一つだとしてあっさりとは片付けられる概念について、さまざまな局面から考察を加えて、そのような単純な見方を斥けていく手腕は高く評価された。もちろん、こうした議論はこれからさらに具体的な問題の考察を伴って行く必要があるが、しかしここで確実にその入り口が示されたのである。本論文において示された「現実界」は、単なる「象徴界」や「想像界」に還元されない、いわば「表現し得ないもの」であるが、かといって、それは指示されるだけのものではない。なぜなら「イデオロギー」はそれ自体言説として具体的な内容を持っているからである。逆に言えば、「現実界」は「象徴界」と「想像界」とを前提として成立する。そのことを筆者は「イデオロギー」の問題として解剖してみせた。

もちろん、審査員からの批判点もある。この点で多く言及されたのは、上にも示した三島由紀夫の取り扱いである。それを持ち出す必然性が説得力に欠けるというものであった。これについては、微細を尽くした筆者による説明が審査の席上筆者から語られた。それで完全に納得したわけではないが、それはこれからの具体的な議論の展開で問題にされることで審査員の了解が得られた。また、表記上や、誤解の与えるような哲学史上の記述については、簡単な訂正ですむところから、これらについても了解が得られた。

以上のような問題点はあるが、本論文の内容自体の評価に関わるものではない。「イデオロギー」という、精神分析理論にとってあまり顧みられない問題を取り上げて、その議論の場から、従来の精神分析理解の刷新を迫る土佐巖人氏の試みは十分に課程博士論文として評価することができる。

以上により、審査の結果、博士（哲学）の学位を授与するに値する論文と判定した。